

# SHOW HEY シネマルーム

★★



Data

監督：飯田譲治

製作プロデューサー：平野隆

原作：望月峯太郎

出演：妻夫木聡 / SAYAKA / 山田孝之 / 藤木直人 / 根津甚八 / 寺田農

## 👁️👁️ みどころ

望月峯太郎原作の人気コミックの映画化。「売り」は「世界の終わり」を表現するためのウズベキスタンでの全編ロケ。一面白い灰に覆われた荒涼たるスクリーンは、美しいし、廃墟となったまちのリアルさもグッド。しかし、ストーリーがワンパターン。SAYAKAも熱演しているが・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### <原作は望月峯太郎の人気コミック>

この映画の原作は、1994年から1999年にかけてコミック誌『ヤングマガジン』に連載された全10巻のコミック『ドラゴンヘッド』。650万部以上の売れ行きを記録した大人気作とのことだ。

そのテーマは、「世界の終わり」。謎めいたストーリーと壮大な世界観が売りモノだそう。私はもちろんこのコミックを読んだことはないが、松田聖子の娘である「SAYAKA」がはじめて本格的映画に出演するとのことで、予告編を何回か観て、「これは時間があれば観ておこう」と思っていた作品だ。

しかし・・・。

### <ちょっとしつこい冒頭シーン>

トンネルの中、修学旅行客を乗せた新幹線が原因不明の事故を起こし、乗客は全員死亡した。生き残ったのは青木テル（妻夫木聡）と瀬戸アコ（SAYAKA）の2人。いや、もう1人、いじめられっ子の高橋ノブオ（山田孝之）を含めた3人だけだった。

映画はテルの顔面のアップから始まる。やっと意識を回復して周りを見わたすテル。楽しく語り合っていた新幹線の列車内の友人達は全員死亡。テルは座席の下に落ちた物を拾

おうとして、座席の下に潜り込んでいたため、たまたま助かったのだ。

あまりにも変わり果てた状況の中、一体何が起こったのか？今どんな状況なのか？これからどうなっていくのか？生き残ったのは俺1人だけなのか？・・・etc、疑問と不安が広がり、テルはふらつきながら周りを歩いていた。するともう1人、懐中電灯をつけて列車の中にうずくまっている高校生ノブオがいた。しかし、ノブオは、「助けなんか、来ねえよ！」と何か変に状況を覚っている様子。そして言っていることも少しおかしい・・・。

こんな絶望的な状況の中で、急に自分が「大将」になったつもりなのか・・・？ノブオは「いっとくけど、ホントに僕のこと甘く見るなよ！」と言ってテルに襲いかかってきた。さらにこのノブオの行動はさらにエスカレートし、ケッタイなメイクをして、変な槍を作って、テルに襲いかかってきた。まさにマンガ的・・・。いや、確かに原作はコミックだから、それでいいのか・・・？

このようにして、せっかく生存者がいたと一安心したのに、ノブオから列車の外につき落とされたテルが列車の下で見たのは、左足をケガしてじっと怯えている瀬戸アコだった。彼女も意地悪な生徒からトイレに閉じ込められていたため、偶然助かったわけだ。そしてテルとアコの2人は、トンネルの中を脱出していく。

映画の冒頭シーンは、このストーリーを延々と描く。崩れた新幹線、曲がりくねったレール、死亡した友人や、先生たち。そしてここはトンネルの中だということは、映画がスタートしてから5分も経てば十分理解できる。スクリーンの色調はよく工夫されており、新幹線のセットや多くの「死体」のリアルさもそれなりによくできているから、それはそれでいいのだが、一体いつまで、トンネル内、新幹線内の描写が続くのか・・・？

「もういいよ、もう分かったよ」と思い、イライラしながら次の展開を待たざるを得なかった。

## ＜トンネル脱出後もワンパターンのストーリー＞

テルとアコの2人はやっとトンネルを脱出した。スタートからこの間約40分・・・。そこで2人が見たものは・・・？後述のように、ウズベキスタンの荒涼とした景色は見事だし、破壊された都市や破壊された東京の描写も見事。しかしストーリーは・・・？

2人はとにかく歩いた。そしてあるまち（廃墟）に入った。生き残った人間がいたという安心も束の間、彼らはパニック状態に陥った人間たちだった。ギリギリの危機を脱出した2人はまた次のまちへ。しかしそこでもまた生き残りの人間たちが・・・。

この生き残りの人間たちとして、最初のまちに登場するのは、藤木直人、寺田農、近藤芳正の3人。そして次のまちで登場するのが、根津甚八、嶋田久作、松重豊など。そしてさらには恐怖を取り除くため、「脳の手術」をされた双子の兄弟まで登場する。根津甚八や寺田農をはじめ、芸達者な役者を揃えているものの、ストーリーがワンパターンだから全然面白くない。またこのような事態だから、クールに現実を見つめている藤木直人、寺田

農、根津甚八のセリフはきちんと聞き取れるものの、パニック状態となっている近藤芳正は、大声でわめいているだけの感じとなるので、何を言っているのがよく分からない。さらにイライラして周りのモノにあたりちらしているだけ。

観客は映画のスタートから、人間たちがどんな状況に置かれているかを一瞬にして理解できているから、スクリーン上で展開されるこれらの人間たちのワメきちらす姿は、いかにも馬鹿げて見えてくる。真剣にやっていたらやっているほど、また大声でわめけばわめくほど、「もういいよ」、「もう分かったよ」となってしまう。

ヘリコプターに助けてもらったテルは、またそこから振り落とされた。そしてやっと1人東京のまちにたどり着いたテルが見たものは・・・？

### ＜売りモノは全編ウズベキスタンでのロケ＞

トンネルから抜け出したテルとアコが見た荒涼たる景色はウズベキスタンでロケしたものの。廃墟となり一面白い灰に覆われた世界を表現するため、石灰の粉で覆い、また人が吸い込む可能性がある時には小麦粉を振りまいたとのこと。

このように全員が数ヶ月にわたってウズベキスタンに入り、全編ウズベキスタンでロケを敢行したというのが、この映画の売りモノだ。それは確かにその通り。深作欣二監督の最後の作品となった『バトル・ロワイアルⅡ』における東京大爆発のシーンの「チャチ」さや、最後の脱出は果たした七原秋也（ななはら・しゅうや）がアフガニスタンと思われる土地で仲間たちと再会するシーンの不自然さに比べると、この映画のスクリーン上での視覚効果は立派なモノだ。

### ＜最後まで席に残ったのは、MISIAの主題歌を聴くため・・・＞

私は正直に言うと、最初のトンネル内のシーンが30分くらい続く中、「もういいや。途中で出よう」と何回も考えた。何人かの登場人物が現れるたびに、危険にさらされては脱出し、また危険にさらされるというストーリーを見せつけられ、さらにはわめいている人間をずっと見ていると、「もう出よう、もう出よう」と思ったものだ。

しかし結果的に最後まで残ったのは、この映画の主題歌である「心ひとつ」という曲をMISIAが歌っていることをあらかじめパンフレットで読んでいたから。

最後の火山の大爆発のシーン。そしてラストのメッセージの中、ピアノ伴奏の美しいMISIAの曲が流れ始めた。ちょっと難しい曲だが、さすがMISIAが歌ういい曲。この曲を聴いただけでよしとするか・・・。

2003（平成15）年9月29日記